

# 霊的質料とボナヴェントゥラの質料理解

——自然学と形而上学——

---

石田 隆太

## 一 序

本稿の目的は、霊的質料を媒介として、ボナヴェントゥラの質料理解が自然学と形而上学の両面にわたることを説得的に示すことにある。

かつてエティエンヌ・ジルソンは、ボナヴェントゥラの天使論を論じるなかで、質料理解に関するトマス・アクィナスとボナヴェントゥラの違いを次のように述べていた。

天使に質料が帰される場合にはどんな質料について語られているのかを見定めることが残っている。聖トマスの教説では、それに対して解答することに何のためらいもない。彼が言うには、質料とは物体のことである。かくしてまさに完全に帰結することには、彼は天使に対してあらゆる質料性とあらゆる物体性を同時に拒絶する。それとは反対に聖ボナヴェントゥラは、質料という語を最も広い意味で用いる。そして彼が常に理解しているのは、質料は全くもって未規定な可能態だということである<sup>1)</sup>。

---

\*) 本稿は JSPS 科研費 22K12965 の助成を受けたものである。また匿名の査読者に対してこの場を借りて感謝したい。

\*\*\*) 引用文はすべて拙訳である。( ) は原語を示すのに使い、[ ] は訳者による補いを示す。また下線部はすべて引用者の強調である。

1) É.Gilson, *La philosophie de saint Bonaventure*, 3 ed., Vrin, 1953, 200.

以上の評価にもとづいてジルソンは、トマスの質料理解が自然学的であるのに対して、ボナヴェントゥラのそれが形而上学的であることを示唆する<sup>2)</sup>。しかしながらトマスは、形而上学的な観点でも可能態が質料の規定において本質的であることを十分に理解しているし、まさに天使の非質料性を論証する際に質料の可能態性を考慮に入れている<sup>3)</sup>。

このことを踏まえて改めて聞きたいのは、ボナヴェントゥラの質料理解についてもそれを単に形而上学的だと評価するだけでよいのかということである。この点について考えるためにおそらく最も効果的なのが、霊的質料に注目することである。ボナヴェントゥラが天使や人間の魂という非物体的な事物に霊的質料を措定する観点の詳細を見ていくと、ここでは形而上学のみならず自然学の観点が必要なことがわかる。敢えて言うなら、霊的質料について正確に理解するためには形而上学だけでは不十分である。

ボナヴェントゥラの質料理解については、主として『命題集注解』第2巻にもとづいて、形而上学的な側面と自然学的な側面の両面がすでに先行研究によって分析されている。レイモンド・マッケンの研究は、まさにその両面がボナヴェントゥラにおいて質料を哲学的に考察する二つの側面であることをはっきりと明示する<sup>4)</sup>。アヴィセンナからドゥンス・スコトゥスにいたる質料観念の歴史をたどるアントニオ・ペレス・エステベスの研究も、ボナヴェントゥラの考えをそのように描く<sup>5)</sup>。他方で

2) Gilson, *La philosophie de saint Bonaventure*, 200-1. デイヴィッド・ケックはジルソンの評価を適切なものとして引用する: D. Keck, *Angels & Angelology in the Middle Ages*, Oxford University Press, 1998, 99. アーナン・マクマランも、トマスが質料を物体ないし物質の意味に限定して捉えていることを強調する: E. McMullin, "Introduction: The Concept of Matter", E. McMullin (ed.), *The Concept of Matter in Greek and Medieval Philosophy*, University of Notre Dame Press, 1963, 11.

3) 石田隆太, 「質料概念と天使の非質料性——トマス・アキナスによる天使論の一側面」, 『中世哲学研究』35 (2016): 22-40.

4) R. Macken, "Le statut philosophique de la matière selon Bonaventure", *Recherches de théologie ancienne et médiévale* 47(1980): 188-230; "Le statut de la matière première chez Bonaventure", I. Vanderheyden (ed.), *Bonaventura: Studien zu seiner Wirkungsgeschichte*, Dietrich-Coelde-Verlag, 1976, 94-103.

5) A. Pérez Estévez, *La materia, de Avicena a la escuela franciscana (Avicena, Averroes, Tomas de Aquino, Buenaventura, Pecham, Marston, Olivo, Mediavilla, Duns Escoto)*, Ediluz, 1998, 163-221.

ボナヴェントゥラにおける靈的質料については、これらの研究でも言及されるものの、ジルソンのように天使博士との比較がしばしば問われることもあってか、それがボナヴェントゥラ自身にとって何だったのかがあまり問われてこなかった。12世紀と13世紀における靈的質料観念の歴史をたどるアルベルト・アーラの研究だけは、ボナヴェントゥラのほとんどすべての著作を分析の対象とすることで、靈的質料に関する彼の考えが彼自身の神学的な見方に依拠していることを説得的に論じた<sup>6)</sup>。ただしアーラは、基本的に天使論の枠内で靈的質料について論じており、マッケンやペレス・エステベスの研究を参照していない。

以上を踏まえて本稿では、まずは『命題集注解』第2巻にもとづいて靈的質料をボナヴェントゥラの質料理解のなかに位置づけたうえで、靈的質料も含めた彼の質料理解を最晩年の著作である『ヘクサエメロン講解』においても読み取ることにより、先行研究にはない新たな貢献を行うことにしたい。

## 二 『命題集注解』第2巻における靈的質料と質料理解

靈的質料に関するボナヴェントゥラのテキストとして最も重要な箇所は、『命題集注解』第2巻に集中している。一つは「諸天使における本質の単純性について」(*De simplicitate essentiae in Angelis*) 論じられる第3区分第1部第1項であり、第1問題「諸天使は質料と形相から複合されているか」(*Utrum Angeli sint compositi ex materia et forma*) と第2問題「諸天使がそれから複合されている質料は物的なものどもの質料と同じか」(*Utrum materia, ex qua compositi sunt Angeli, sit eadem cum materia corporalium*) がある(II.89-102)<sup>7)</sup>。もう一つは「アダムの魂は質料から産出されていたか」(*Utrum anima Adae fuerit producta ex materia*) を問題にする第17区分第1項第2問題である(II.413-16)。これら三つの問題に対するボナヴェントゥラの解答にもとづいて、靈的質料が彼の質料理解に占める位置を見ていく。

6) A.Ara, *Angeli e sostanze separate: L'idea di materia spiritualis nel Medioevo*, Vol. 2, Edizioni Sant'Antonio, 2020, 469-647.

7) ボナヴェントゥラの原典としては、クアラッキ版の全集(1882-1902)を用いる。本文では巻数と頁数のみを併記する。

## 二・一 類の原理としての質料

彼は、諸天使における複合を『命題集注解』第2巻で最初に問題にする箇所（第3区分第1部第1項第1問題）において、わずかではあるが形而上学や論理学の観点からその複合について言及する。すなわち天使を「類における存在者」(ens in genere)として捉える観点である。この場合の複合は、形而上学的には現実態と可能態の複合であるのに対して、論理的には類と種差の複合である(II.91)。マイケル・サリヴァンも注記するように、ここでは「類」という言葉で形而上学的な観点と論理的な観点の両方が含意されている<sup>8)</sup>。ボナヴェントゥラはそうした意味での類の原理を、諸天使における質料と形相による複合の一つである本質的複合(compositio essentialis)のなかに見出そうとする。彼によれば、天使は定義されるものであり、そのかぎりて類の本性と種差の本性を分有する。類の本性は他の諸天使と一致する側面である一方で、種差の本性はそれらと異なる側面である(II.90)。このようにして彼は、霊的質料にとって固有な側面についてはまだ語らないものの、諸天使における複合が形而上学や論理学という学知との関わりでも考慮されることをすでに示している。

## 二・二 形而上学と自然学から見た質料

続く第2問題において彼は、質料に関する体系的な理解を提示するなかで、霊的質料が固有にはどのようにして見出されるのかを説明する。ここでは、彼による長い解答のなかで形而上学と自然学の対比が述べられる二つの部分に注目しよう。一つは質料を類比(analogia)によって認識する場合のことである(II.96-97)。次の引用文からも窺えるように、可能態と現実態が見出される二通りの関係性に依じて質料と形相も二通りの仕方で見出される場合に、彼は質料を類比によって認識すると言う。その二通りの仕方がまさに形而上学と自然(哲)学という二つの学知に対応する。

---

8) M.Sullivan, "The Debate over Spiritual Matter in the Late Thirteenth Century: Gonsalvus Hispanus and the Franciscan Tradition from Bonaventure to Scotus", PhD. Thesis, The Catholic University of America, 2010, 70n102.

さて、類比による〔質料の〕認識は類似にもとづく関わりによる。しかるに、質料の〔形相に対する〕関わりは可能態による。それゆえ、この認識は形相に対する質料の関わり合いによるのであり、可能態を媒介とする。さて、質料の可能態は形相と二通りの仕方に関わり合うことができる。一つは形相に対して存在者 (ens) の観点において支え (fulcimentum) を差し出すかぎりでのことであり、形而上学者が考察するのはまさにこの場合である。もう一つは可動的なもの (mobile) の観点の下でのことであり、自然哲学者が考察するのはまさにこの場合である (II.96)。

続けてボナヴェントゥラは、形而上学と自然学のそれぞれにおいて質料がどのように類比的に見出されるのかを説明するなかで、靈的質料そのものに接近する。まず形而上学的な観点においては、靈的なものどもの質料 (materia spiritualium) が物的なものどもの質料と同様に自らの形相に対して存立 (existere) や自存 (subsistere) をもたらすという共通点を指摘する一方で、物的なものどもにおける質料との相異を実体性の分有における大小に即して説明する。次の引用文では、到来する形相に応じた質料の違いから、質料が属する実体の違いが導かれる。靈的質料は、実体形相だけの基体だとされる。

すなわち〔質料は〕、靈的なものどもにおいては実体形相の下のみ立ち、上位の諸物体〔すなわち諸天体〕においては実体形相と量の下に立ち、下位の諸物体〔すなわち月下界の諸物体〕においては実体形相、量、反対性 (contrarietas) の下に立つ。そして実体の類において純粹にあるものは自体的に立ち独立するものの観点をより多く分有する一方で、諸付帯性の本性により多く近づくものは〔実体性から〕より多く遠ざかっているので、諸々の靈的実体はより先により真に実体であり、続いて上位の諸物体が、最後に下位の諸物体がそれに続く (同)。

次に自然学的な観点においては、さまざまな属性 (proprietas) に関する変化の基体が物的なものどもにおいても靈的なものどもにおいても

ある一方で、変化の対象となる属性が霊的実体、天体、月下界の物体それぞれでは異なることが指摘される。次の引用文では、対象となる属性の違いから、質料そのものの違いが導かれる。霊的質料については、それが霊的実体に見られる属性の変化の支えであることがわかる。

すなわち質料が変化の支えでありうるのは、可滅的な諸物体におけるように位置と形相に即してか、あるいは上位の諸物体〔すなわち諸天体〕におけるように位置に対してのみか、あるいは霊的な諸実体におけるように〔神からの〕流入 (influentia) および諸々の性向 (habitus) の受容と喪失に対してかである。そしてこの考察によれば質料は、可滅的な諸物体においては固有にあり、不可滅的な諸物体においてはより少なく固有にあり、諸々の霊においては最小限にある。またそこから、諸々の霊は非質料的だと言われることもある。なぜなら、それらはそうした〔変化の〕可能性を最小限にしかもたず、そのかぎりでは質料は最低のものだからである (II.96-97)。

ここで注意したいのは、たしかに自然学的な観点においては、特に可滅的な物体がもつ質料と比べて霊的質料はほとんど質料ではないということもできるが、しかし霊的実体の質料性が皆無だという見解はボナヴェントウラのものではないということである。むしろここで読み取りたいのは、質料性が最大限に低いという霊的質料の固有性は自然学的な観点から表現されたものだということである。質料性の有無のどちらを選ぶかという問いにおいて、彼は常に前者を選択する。霊的実体にも特定の属性の基体が必要だからである。そうした側面がここでは自然学的な観点から言われている。

形而上学と自然学の対比がより詳細に示されるのは、質料的原理の還元 (reductio) について三通りの仕方が述べられるもう一つの部分である (II.97)。ここでの還元とは、問題となる学問の対象すべてに当てはまる原理を抽出することを意味する。質料的原理を還元する三つの仕方とはすなわち、生成消滅について考察する自然学者 (naturalis) ないし下級自然学者 (physicus inferior) の仕方、天体を含むあらゆる可動的な物体について考察する普遍自然学者 (physicus universalis) ないし上級自然学

者 (physicus superior) の仕方, あらゆる存在者について考察する形而上学者の仕方である。この三つのなかでは, 靈的質料をもつ諸天使や人間の魂をより正当な仕方での考察の範囲に含めることができるのは形而上学だけである。そのことは, あらゆる被造物について考察する形而上学に関する次の引用文から窺える。

形而上学者はあらゆる被造物の本性を, とりわけ自体的に存在する実体の本性を考察する。そうした実体においてはまず, 存在の現実態 (actus essendi) を考察することができ, この現実態を与えるのは形相である。次に, 自体的な存立の安定性 (stabilitas per se existendi) を考察することができ, この安定性を与えたり提供したりするのは形相が寄りついているところのもの, すなわち質料である (II.97)。

この箇所はボナヴェントゥラにおける《esse》と《existere》を考へるうへで興味深い箇所ではあるが<sup>9)</sup>, むしろここで注目したいのは, 形而上学にふさわしい仕方での質料的原理を還元することで見出される靈的質料は, 一般的には考察の対象であるものの特殊的にはそうではないということである。言いかえるなら, ここでの質料とはあくまでもあらゆる被造物にとって共通に見出される原理である。後でボナヴェントゥラも述べるように, 「形而上学者によれば, あらゆる自体的な存在者において質料の一性を措定することができる」(II.97)。したがって, ジルソンも注目していたこの形而上学的還元は, たしかに靈的質料について考察する手段の一つではあるが, この手段に尽きるわけではない。そもそもボナヴェントゥラの質料理解は, 還元によって質料の一性を考慮するだけにとどまらない。

9) 具体的には, 「存在」を「本質」(essentia) のことだと解釈する立場と, あくまで形相が所有する現実性のことだと解釈する立場がある。前者の立場を採用するものは次の通り: G.Klubertanz, "Esse and Existere in St. Bonaventure", *Mediaeval Studies* 8 (1946): 169-88. 後者の立場を採用するものは次の通り: P.King, "Bonaventure (b. ca. 1216; d. 1274)", J.J.E.Gracia (ed.), *Individuation in Scholasticism: The Later Middle Ages and the Counter-Reformation, 1150-1650*, State University of New York Press, 1994, 141-72. 日本語による研究では前者の立場がしばしば採用される: 長倉久子, 「ボナヴェントゥラ存在論に関する若干の考察」, 『カトリック研究』(上智大学神学会) 32 (1977): 346-60; 坂口ふみ, 『天使とボナヴェントゥラ——ヨーロッパ13世紀の思想劇』, 岩波書店, 2009, 146-47.

### 二・三 人間の魂における質料

アダムの魂は質料から産出されていたのかという問題を通じて、ボナヴェントゥラは人間の魂がもつ質料性について論じる (II.413-16)。彼によれば、人間の理性的魂はそれ自体で独立性の高い実体であるがゆえに、存立の基盤となる質料的原理と存在の基盤となる形相的原理の二つを内部にもつ。ところで、身体に基礎づけをもつ非理性的魂 (*anima brutalis*) にはそのような二原理を当てはめなくてよい。したがって、人間の魂が質料をもつことは認められるべきであり、その質料こそ人間の魂の靈的質料 (*materia spiritualis*) である。

ここでは、ボナヴェントゥラがはっきりと《*materia spiritualis*》という表現を用いて靈的質料の固有な側面を述べるだけでなく、形而上学的還元と自然学的還元の次元の異なりについても言及していることが特徴的である。それぞれの還元が意味するのは、質料概念に対する形而上学の領域での一般化と自然学の領域での一般化である。次の引用文がそのすべてを端的に示している。

そしてそうした質料 [つまり人間の魂における質料] は、延長の存在を超えて、また欠如および消滅の存在を超えて高められており、だから靈的質料と言われる。そしてさらには、延長の存在に関わるかぎりで、また欠如の下で存在をもつかぎりにおいて質料的原理について語っていた人々が理性的魂は質料をもたないと言っていたのは、その一般性における質料について言おうとしていたのではなくて、むしろ、天使の単純性について既述のように、自然学的還元 (*resolutio physica*) がそれに対して成り立つかぎりでの質料についてである (II.415)。

この引用文はまず、人間の魂における靈的質料が自然学的還元によって得られる質料とは別物だと述べる。前者は延長、欠如、消滅と無縁である。他方で、延長や欠如と関係しながら存在する質料はあくまで自然学的還元の対象である。後者によって得られる質料理解と照らし合わせることで靈的質料に固有な側面が示されている。次に、「その一般性における質料」という言い方で、ボナヴェントゥラは形而上学的還元



よって得られる質料をも考慮していたことが窺える。この質料理解には靈的質料も含まれる。なぜなら、この質料理解は人間の魂に認められるような質料をも射程に収めているはずだからである。このようにして靈的質料は、人間の魂という事例においても自然学と形而上学という二つの観点から記述される。

### 三 『ヘクサエメロン講解』における質料理解

次に、自然学と形而上学という二つの観点から靈的質料を捉えるボナヴェントゥラの理解を、彼の最晩年の著作で未完に終わった『ヘクサエメロン講解』(*Collationes in Hexaëmeron*)において読み取ることを試みる<sup>10)</sup>。『命題集注解』から20年ほど後に書かれたこの著作においても、ボナヴェントゥラは靈的質料を考慮に入れていた<sup>11)</sup>。それがさらに自然学と形而上学という二つの観点から見てどうであるかを見ていく。

まずは知恵 (*sapientia*) について述べられる第2講解の一部を見てみよう。ボナヴェントゥラは、第20節から第27節にかけて、知恵の形式の一つとして挙げられる全形的なもの (*omniformis*) を神による御業の痕跡のなかに見出そうとする (V.339-40)。そのなかで彼は、三位一体の神秘を表現する痕跡の一つとして、あらゆる被造物がもつ質料、形相、複合に言及する。次の引用文にあるように、質料は御父に、形相は御子に、複合は聖霊に対応する。質料と御父の対応については、質料性ないし物質性が御父に見出されるわけではなくて、諸事物の起源であるという点が両者に共通することが重要である。

さて、実体においては、神の本質を表現するより崇高な痕跡がある。すなわち、あらゆる被造の実体は質料、形相、複合をもつ。それは、起源の原理ないし基礎、形相的完成者 (*complementum formale*)、結束 (*glutinum*) のことである。[中略] そしてこれらに

10) 『ヘクサエメロン講解』については次の現代語訳を参照した：J.M.Hammond, *Conferences on the Six Days of Creation: The Illuminations of the Church*, Franciscan Institute Publications, 2018; P.Maranesi, *Sermoni teologici/1: Collazioni sull'Exameron*, Città Nuova, 1994; M.Ozilou, *Les Six Jours de la Création*, Desclée/Cerf, 1991; W. Nyssen, *Das Sechstageswerk*, 2 ed., Kösel-Verlag, 1979.

11) Ara, *Angeli e sostanze separate*, 2: 623-39.

おいては、三位一体の神秘が表現されている。それは、起源 (origo) たる御父、像 (imago) たる御子、繋ぎ手 (compago) たる聖霊のことである (V.340)。

この引用文の直後では、被造物に関して、質料的原理ないし起源の原理と形相的原理ないし形相的完成者の区別が、受動的原理と能動的原理の区別に重ねられる。このようにして被造物に二つの原理とその二原理の複合を見出すことは、神の三位一体を見出すことと重ねられるのみならず、被造物の神格化を拒絶する表明にもなる。とりわけ諸天使や人間の魂といった非物的な実体については、それらが神と同様に純粹現実態であったり複合をもたない単純なものであったりする可能性を拒否することにつながる。

さて、起源の原理の観点が形相的完成者から被造物における区別としてもつのは、神のペルソナにおける (in divinis) ようなヒュポスタシス的な (hypostaticus) 区別ではなく、付帯的な区別でもなくて、むしろそれらの一方は能動的原理であり他方は受動的原理であるような諸原理の区別である。そしてこうしたことを被造物から取り去ることはそれから三位一体の表現を取り去ることであり、被造物は純粹現実態であり複合をもたないと言うようなことである (同)。

この二つの引用文からは、三位一体の痕跡について述べる神秘主義的な文脈にあっても、ボナヴェントゥラがあらゆる被造物のもつ質料性について語っていることが窺える。さらにそうした質料は、あらゆる被造物において共通に捉えられるかぎりにおいて、形而上学的還元によって得られる質料と同一視することができる。

次に、残念ながらアーラは分析を省略した第3講解では御言葉 (Verbum) について述べられており、そこでボナヴェントゥラは、第3節から第9節にかけて非被造の御言葉としての御父について語る (V.343-45)。興味深いことに、そのなかで今度は自然学的還元によって得られるような質料が考慮される。

さらには、最も現実的なものから可能的なものでもないし質料的なものもが生じる。その理由は次の通りである。御父は、自らから始める原理、無から始める原理、或る質料的なものから始める原理として知解される。そして御言葉は、御父を自らから始まる原理として表出し、その場合は聖霊と自らの産出ないし永遠のものどもの産出を開陳し表現する。また御言葉は、御父を或るものを無から始めさせるものとして表出し、その場合は諸天使や[人間の]諸々の魂のような永劫的なものどもの産出を表現する。また御言葉は、御父を或るものを質料的なものとしての或るものから始めさせるものとして表現する。しかるに、或るものから生じるものは、それが生じる前には可能態においてある。それゆえ、それは可能的なものどもを表現しなければならない(V.344)。

ここでは、御父が質料的原理であることの側面として、御言葉との関わりで三つの側面が示される。一つは「自らから始める原理」(principium principans de se)であり、御言葉と聖霊という永遠のものを産出する側面である。次に示されるのが「無から始める原理」(principium principans de nihilo)であり、諸天使や人間の諸々の魂という永劫のものを産出する側面である。最後に示されるのが「或る質料的なものから始める原理」(principium principans de aliquo materiali)であり、おそらく物体的な被造物すべてを産出する側面を意味する。

注目したいのは、天使や人間の魂という靈的質料をもつはずの被造物と、それ以外の物体的な被造物が産出の質料的原理という点で区別されていることである。すなわち、物体的な被造物が産出される質料的原理は「或る質料的なもの」、つまりは自然学的還元によって得られるような質料に見出されるのに対して、それとは全く別種の質料をもつ靈的な被造物が産出される質料的原理は「無」に見出される。このことから、靈的質料が産出の質料的原理としては機能せず、その点で物体的な被造物の質料と本質的に区別できることが窺える。「靈的質料」という言葉自体は出てこないものの、物体的な被造物の質料が「或る質料的なもの」と名指しされていることに「別の質料的なもの」の存在が了解されていると読み取ることは、ボナヴェントゥラの質料理解とむしろ整合

的である。このようにして、ボナヴェントゥラが『命題集注解』において示した質料理解のうち、形而上学的還元によって捉えられる質料のみならず、自然学的還元によって捉えられる質料をも『ヘクサエメロン講解』のなかに読み取ることが可能である。

最後に、第4講解のなかから、ボナヴェントゥラの質料理解と密接な関連を読み取ることができる箇所を二つ示すことにしよう。第4講解から第7講解では、『諸学芸の神学への還元』(*De reductione artium ad theologiam*) や『精神の神への道程』(*Itinerarium mentis ad Deum*) と同様に、哲学的な学知に関するボナヴェントゥラの理解が示される (V.348-68)。具体的には九つの学知が想定されている。すなわち事物 (*res*) に関わる学知としては形而上学、数学、自然学の三つ、記号 (*signum*) に関わる学知としては文法学、論理学、修辞学の三つ、道徳 (*mos*) に関わる学知としては倫理学、家政学、政治学の三つで、合計で九つある。第4講解は事物に関わる学知と記号に関わる学知について述べているが、ここで注目したいのは前者に属する二つの箇所である。

一つは形而上学に関して述べられる箇所である。第7節で形而上学の主題が、実体と付帯性、普遍と個別、可能態と現実態、一と多、単純と複合、原因と結果という六つの対に分類されたうえで、第8節から第13節にかけてそれぞれの対に関する哲学者たちの誤謬が指摘される (V.350-51)。哲学批判を行うこれらの箇所は、ボナヴェントゥラにとっては同時に、自らが同意できるような穏健な哲学を示すという役割も果たしている。五番目の対である単純と複合に関する部分の全文を引用すれば次の通りである。

第五は単純と複合への区分である。そしてここにも多くの誤謬があり、それは或る被造物が単純だと言うようなことである。なぜならその場合、被造物がただ神にのみ属する純粹現実態であることになってしまうからである。また神に属するものを被造物に帰することは危険である。それゆえ、仮にそれが真ではなかったとしても、天使は複合されていると言う方が、それは単純だと言うよりも危険が少ない。なぜなら、わたしがこのことを天使に帰して、神に属するものを天使に帰そうとしないのは、わたしが神への崇敬に

対してもつ敬虔さのゆえだからである。ところで、真理に即してそうである [つまり天使は複合されている] と思われる。なぜなら、「形相は基体ではありえない」とポエティウスが言っているので、その場合 [つまり天使が形相のみである場合] に天使には、喜びであれ悲しみであれ、何も付帯しないことになってしまうからである (V.351)。

この箇所ではボナヴェントゥラは、天使が質料と形相の複合体であるかどうかという論点を正面から取り上げる。そのことによって彼は、純粹現実態としての神を信仰のうえで確保することだけではなくて、天使には喜びや悲しみといった或る種の情念が付帯するという真理も擁護しようとする。これらの情念は無論のこと人間が抱くような情念とは別種のものと推測されるが、少なくとも彼にとっては天使にとって欠かせない要素であったことが窺える。おそらく重要なのは、靈的な被造物である天使は、やはり被造物であるかぎり何らかの付帯性を受容するのであり、それが天使における質料性を要請する哲学的な根拠にもなるということである。この箇所にあるように、神学的な教義の擁護を常に考慮するボナヴェントゥラであっても、信仰による要請という仕方だけではなくて、理性的な真理との整合性を図るという仕方によって天使の質料性を主張しているからである。そしてその質料性を具現するものこそ、靈的質料にはかならない。

もう一つの箇所として見ておきたいのは、自然学に関して述べられる第 17 節である。靈的質料そのものは登場しないものの、そこでボナヴェントゥラは自然学の分野において見出される物体の種類を可能なかぎり列挙する。この列挙からは、彼が自然学の各分野に対する一定の見通しを晩年の著作においても示していることが窺える。仮に物的な被造物の質料を細かく種別化しようとするなら、ここで示される物体の種類に応じて種別化が行われることになるだろう。まずは彼による自然的な物体の下位区分を見ることにする。

実際、哲学者 [アリストテレス] は、あらゆるものを運動によって考察する。すなわち、運動について、場所や時間のような運動の

諸原理ないし諸原因について考察する一方で、エーテルのないし大気上の諸物体 (*corpora aetheralia, meteoricalia*) である諸天体の諸本性を考察し、また元素的な諸物体 [すなわち四元素]、栄養摂取する諸物体 [すなわち植物]、感覚する (*sensibilia*) 諸物体 [すなわち動物]、理性的な (*rationabilia*) 諸物体 [すなわち人間] の諸本性も考察する。——諸天体は『天と地について』(*De caelo et mundo*) で [考察され]、そこで彼はあらゆる運動を完全な運動、すなわち完全な場所的運動へと還元する。ところで、そうした場所的運動は三つある。一つには中心をめぐるものがあり、そこには反対性はなく、かくしてそれは円運動である。あるいは中心からのものがあり、かくしてそれは軽いものどもの運動である。あるいは中心へのものがあり、かくしてそれは重いものどもの運動あるいは直線運動である。大気上の諸物体は『気象論』(*Meteororum*) で [考察され]、そこで彼は諸々の気圧や鉱物について述べる。——元素的な諸物体についてなら『生成と消滅について』(*De generatione et corruptione*) で [考察される]。栄養摂取する諸物体についてなら『植物について』(*De plantis*) で [考察され]、そこには諸々の驚異的な考察がある。——他方で感覚する諸物体についてなら『動物論』(*De animalibus*) で [考察され]、わたしたちはその全体を所有していない。あるいは理性的な諸物体については、『魂について』(*De anima*) とそれに付属する諸著作で [考察される]。すなわち『感覚と感覺されるものについて』(*De sensu et sensato*)、『記憶と想起について』(*De memoria et reminiscencia*)、『氣息と魂について』(*De spiritu et anima*)、『眠りと目覚めについて』(*De somno et vigilia*)、『死と生について』(*De morte et vita*) のことである (V.352)。

ここでは、自然界に存在するすべてのものとして、天体、大気上の物体、四元素、植物、(人間以外の) 動物、人間の六つが物体の種類に応じて区別される。「質料」という言葉こそ出てこないものの、ボナヴェントゥラがここでいわば特殊自然学的な観点から自然界の諸物体を区別していることは間違いない。それゆえ、こうした自然界の諸物体に関する区別を彼の質理解と結びつけようとするなら、それは自然学的還元と

は逆の方向、つまり自然学で一般的に捉えられるかぎりでの質料がそれぞれ種別化されていく方向に向かう。その場合は、自然界における多様な質料のあり方を理解することが可能になる。

#### 四 結

本稿がこれまでに示したのは、『命題集注解』においてボナヴェントゥラの質料理解には自然学と形而上学という二つの学知にもとづく観点があること（第2節）、そして晩年の『ヘクサエメロン講解』においてもボナヴェントゥラのそうした質料理解を読み取ることができること（第3節）の二つである。前者の論点自体は目新しいものではないが、『命題集注解』に見られる質料理解を『ヘクサエメロン講解』にも読み込むことで、このしばしば神秘主義的に解される晩年の著作からもボナヴェントゥラの質料に関する哲学的な思想を読み取ることができるということをここでは強調したい。さらに言うなら、このことはボナヴェントゥラのなかに質料形相論に関する一定の理解が存在していたことを示唆する。彼がアリストテレス哲学の理論を受容していたことも明らかである。

冒頭に引用したジルソンの評価は、たしかに天使の質料性をめぐるとマスとボナヴェントゥラの対立を明快に理解できるという利点はあるものの、やはり両者の質料理解を少し単純化しすぎている。むしろ重要なのは、トマスが天使の非質料性について考えるのに純粹可能態という形而上学的な概念から第一質料を考慮していたのと同様に、ボナヴェントゥラが天使の質料性について考える前提となった質料理解には形而上学のみならず自然学の観点も含まれていたということである。天使の質料性をめぐって最終的には異なる見解を採用した熾天使博士と天使博士も、それぞれの仕方によってはあるが、自然学者であり形而上学者であることを必要に応じて自らに課した。このことは天使論が哲学的な学知の応用を実践する場でもあったことを示している。